

未来をつむぐ「明日の京都」ビジョン あなたとつなぐ府民交流会 In 京都商工会議所

日 時： 平成21年10月11日（日）14:00～16:00

場 所： 京都商工会議所 3階 講堂

登壇者： 山田 啓二 京都府知事

門川 大作 京都市長

立石 義雄 京都商工会議所会頭（京都府商工会議所連合会会長）

齊藤 修 京都新聞社代表取締役社長

池坊 美佳 華道家元池坊青年部代表、「明日の京都」ビジョン懇話
会委員

ジェフ・バーグラント 京都外国語大学教授、「明日の京都」ビジョン懇話
会委員【コーディネーター】

村井杏侑美 第6回京都学生祭典委員長、「明日の京都」ビジョン懇話
会委員【司会】

○司会 お待たせいたしました。「未来をつむぐ「明日の京都」ビジョン あなたとつなぐ府民交流会」を開催させていただきます。

では、ステージ上の皆様を紹介させていただきます。

まず、ゲストのパネリストの紹介です。門川大作京都市長です。立石義雄京都商工会議所会頭です。齊藤 修京都新聞社代表取締役社長です。「明日の京都」ビジョン懇話会委員の池坊美佳華道家元池坊青年部代表です。主催者であります山田啓二京都府知事です。そして、本日のコーディネーターを務めていただきます「明日の京都」ビジョン懇話会委員のジェフ・バーグラント京都外国語大学教授です。

本日司会を務めさせていただきます、私は「明日の京都」ビジョン懇話会委員で同志社大学の村井杏侑美です。どうぞよろしくお願いいたします。

なお、本日は、京都府議会議員の皆様にも御参加いただいておりますので、御紹介させていただきます。渡辺邦子様です。島田正則様です。林 正樹様です。

どうぞよろしくお願いいたします。

では、府民交流会開会に当たり、山田啓二京都府知事よりごあいさつを申し上げます。

○山田啓二知事 本日は3連休のど真ん中の日という、非常にこういう話をするにはふさわしい日かどうか、ちょっと観光京都としては問題のある日に設定をしたような気もするんですけども、そういうときにこうして大勢の皆様にご参加をいただきまして、心からお礼を、高いところから恐縮ですが申し上げたいと思います。本当にありがとうございます。

それから、きょうは京都市内で開く「明日の京都」ビジョンの懇談会なんですけれども、そのパネリストとして、本当にオール京都を代表する方に来ていただくことができました。大変お忙しい中に、こうして京都府の未来を語るためにパネリストとして参加をしていただきましたことに対しまして改めてお礼を申し上げたいと、本当にありがとうございます。

いよいよ京都府の今までの新京都府総合計画も、来年で一定の期日を迎えることになりました。大変、変動の大きい、変化の激しいこの時代にありまして、私たちは正直今を乗り切ることの苦労をしております。しかしながら、今をただ乗り切るだけでは未来は開けない。将来を見据えて、みんなで一つの方向を目指して進むことによって初めて今を乗り切ることができるのではないかというふうに思っております。そのためにも、あすの京都はこうありたい、あすのこういう京都だったら私たちは幸せに暮らせる、そういうビジョンを皆様とともに描いて進んでいける。きょうはその出発点にもなる日だと思っておりますので、私どももパネリストの皆さんと意見を交わしたいと思いますし、後ほどは会場からも提案をいただきたいというふうに時間を準備しておりますので、非常に有意義なきょうの懇談会になりますように、会場の皆様にも御協力をいただきたいと思います。余り長々とあいさつをしておりますと肝心の部分が欠けますので、このくらいにいたします。

もう一度、きょう御参加いただきましたことに心からお礼を申し上げてあいさついたします。ありがとうございました。

○司会 それでは早速ですが、「明日の京都」ビジョン、パネルトークを始めさせていただきます。

これからの進行はコーディネーターのジェフ・バーブランドさんをお願いします。

ジェフさん、よろしくお願いいたします。

○コーディネーター ありがとうございます。

皆さん本当にきょうはたくさんお集まりいただきましてありがとうございます。村井さんは、去年、京都学生祭典の実行委員長をやったので、皆さん学生祭典は今もきょうやっていますから、きょうのこのイベントが終わりましたら、ぜひ学生祭典の方に足を運んでいただきたいと思います。

しかし、私は京都に来て40年なんです、「明日の京都」ビジョン懇話会のメンバーになりまして、大変恐縮に、このメンバーの仕事だけではなくて、きょうのこのディスカッションのコーディネーターまで選んでいただきまして、山田知事初めこの京都府の皆さんがほんとに私を京都人として認めてくれたという気持ちで、やっと40年たって京都人になりました。

ちょっと皆さんに聞きたいんですが、京都府で生まれ育った人、ちょっと手を挙げていただけますか。やっぱり9割ぐらいですね。逆に京都府生まれではない人、ちょっと。結構いるんですね。日本ではない。3人になりましたね。どこですか。韓国。後ろは。中国。韓国、中国。ほんとに京都は国際都市になりまして、その国際都市京都の囲む京都府の府民の皆さんと一緒にきょう考えていきたいと思います。きょうはすごいメンバーです。門川市長、立石会頭、齊藤社長、池坊美佳さん、そして先ほどあいさつしていただきました山田啓二さん京都府知事。皆さんと一緒に話ししていきたいと思います。このパネルディスカッションの進め方として、2回ほど皆さんから発言していただきたいと思います。

まず一番最初は、京都は今どういう問題を抱えているのか、どういう悩みを抱えているのか。特に皆さん自己紹介を兼ねて、自分としての皆さんがどういう現状を把握されてるのか、そして今その現状に対してどういう取り組みをされているのかという話をしていただきたいと思います。もう1回、皆さんにその話をいただいてから、今度は10年20年先の京都府がどうあるべきかというビジョンについて、それぞれのパネリストの皆さんにまた話をしていただきたいと思います。

1巡目は私の左から、山田知事から順番に行きます。2巡目の方が今度、池坊美佳さんの方から帰ってくるような感じでいきたいと思います。

まず、山田知事さん、今京都府が抱えているいろんな問題があると思うんですが、知事さんとしての悩み事、どういうことなのか、どういうことに取り組んでいるのかという話を、自己紹介を兼ねてしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○山田啓二知事 京都府知事の山田でございます。

悩んで、別にこれは個人的な悩みじゃないですよ。個人的な悩みだとまた別のことになってしまうんですけれども。仕事の悩みということだと思ってしまうんですけれども、私自身は今、知事2期目を務めておりまして、ちょうど7年半ぐらいを経過してきたんですけれども、この7年半を自分でやってみて一番思いますのは、今までの私たちが前提にしていたいろいろな問題、基盤というものが崩れていて、そしてその崩れをどうやって補いながら未来へ向かって進むのかというのが、大変難しいテーマになっていると思います。

つまり、今までの行政というのは、ある面では非常に単純だったんですね。戦後、敗戦の中のどん底から立ち上がるころにはキャッチアップ、欧米を見据えてその生活水準に達しようと、それはハードの面でもソフトの面でもそれを見つけて、見詰めて、そこに向かってひたすら走っていけば、行政としては大きな目標を別に検討するまでもなくうまくいった。たくさんの道路をつくろう、安心・安全のために河川を整理しよう、福祉を充実させよう。そして、それによって日本が世界でGDP第2位の国になってきた。そこまではよかったんですけども、そうして気がついたときに、実は日本がそこまでキャッチアップすることができた幾つかの土台や幾つかの問題点が崩れてきてしまってるのではないかということに、私は突き当たってきた気がします。

例えば、日本の代名詞といえば、安心・安全。ほんとに夜でも若い女性が何の心配もなく歩ける。忘れ物をすれば、みんな届けてもらえる。そうした安心・安全の国というのがありました。しかしながら、平成4年から平成14年までの10年間で、京都府の犯罪件数は実に3万数千件から6万5,000件まで刑法犯罪がふえた。何と10年間で2倍近くふえちゃったんですね。今までの安心・安全の日本ってどこへ行ったんだろう。

これはこういった問題だけではなくて、至るところに出てきています。農林水産業。今まではとにかく、お米をじゃあ売れるようにするにはどうしたらいいんだろうか、または売れない場合にどうやってそれを補償するんだろうか。こういう議論をしていた。ところが気がついたら、お米をつくっている人たちの集落自身がいつの間にかみんな65歳以上になっちゃって、このままでいくと集落がなくなってしまうよという時代を迎えつつある。それは働く現場でも一緒に、今までの若い人たちがどんどん出てきて、団塊の世代と呼ばれる人たちが日本の高度成長を支えてきた。しかし、これから10年見たときに、一番統計上変化が起こるのは何かといいますと、実は今1年間に亡くなってらっしゃる方は、大体100万人ちょっとぐらいです。ところが、10年

後の人口統計で見ると、そのころに亡くなってらっしゃる方は、実に140万人になります。となりますと、その割合で京都に当てはめると、京都で毎年死ぬ方が今より6,000人くらいふえる。つまり、阪神大震災の被害者クラスの死亡者数が京都でふえる。となってくると、今までの医療の特に療養病床といったようなベッドの問題ですね。どこで亡くなるのかといったときに、6,000人ふえる人たちは一体どこで亡くなるんだろうという問題が、10年後には確実に起こる。逆に若い人たちは減ってくる。

それからまた、生活の変化もありますね。京都の場合は伝統産業が大変この京都の地域を支えてきた。でも、これだけの人数が集まっていて、和服を着てらっしゃるのは門川市長だけじゃないでしょうか。門川市長は今一生懸命頑張っている、私きょう着てないのは申しわけないんですけども、生活スタイルが多分、二、三十年前とは大きく変わってしまった。自分の父親を見ても、私の家でも、必ず父親が家に帰ってくると和服に着がえてましたね。母親がそれを手伝うのをいつも見ていました。しかし、今私も帰ってから何を着ているのかなと思うと、ううん、パジャマかジャージかみたいなところがあって余り言えないんですけども、これだけやっぱり生活のライフスタイルが変化している中で、じゃあ私たちは伝統産業をどうやって守り育てていくんだろうか。文化も一緒ですね。文化もどうやって、この京都の持っている素晴らしい文化や環境を守っていくんだろうか。一つ一つ、私たちが前提にしていたものが崩れていってしまったんじゃないかということをつくづく感じます。

じゃあその上で、どういう取り組みをしたらいいのか。私は一つの答えに、安心・安全の面で皆さんに訴えたいことがあります。それは先ほど申しましたように、平成4年から平成14年までに3万数千件だった犯罪は、6万5,000件までふえてしまった。そのときに、このままでは本当に京都は大変なことになるということで、私どもが取り組んだことが二つあります。一つは警察官をふやす。それ以降、350人の警察官をふやしました。でも、これは警察官の数でいきますと五、六%の数の警察官です。これは行政の努力です。必死に行政は努力をしています。しかし、多分五、六%の警察官をふやしただけでは限界があります。国だって一生懸命今まで行政努力をしてきました。結果は860兆円の借金をしちゃったから、この努力はかなりいいかげんなものだったというふうに私は思うんですけども、そうってしまった。我々京都府も京都市と一緒に協力をして、少人数教育や医療費の助成、全国トップクラスまで上げ

てきました。でも財政には限界があります。努力はしてます、努力はしてますという
も言うのが、私どもの言いわけになっていたわけです。ですから、それに対して警察
官をふやしました。それだけではやっぱりだめだということで、当時、京都市を中心
に90近い子ども・地域安全見守り隊がありました。この見守り隊を、ちょうど子供た
ちが続けざまに襲われるという事件がありましたので、多くの府民の皆様をお願いし
て、つくっていただきたいというふうに言いました。そうすると、90だった見守り隊
が、1年たたないうちに430の小学校区全部に広がりました。それだけではなくて、
学生の皆さんが防犯のための組織を構成していただける。高齢者の皆様が地域のほん
とにまた見守りをやっていただける。いろいろなPTAの皆様もみんなやっていただ
ける。落書きを消してくれるメンバーもいます。

そしたらどうなったか。実は6万5,000件の刑法犯罪件数は今、急激に減っていま
す。去年で5万件まで減りました。わずか四、五年で30%今度は減ったんです。そし
て、ことは実に12%の、8月末まで減少を記録しています。4万5,000件を切るん
じゃないか、10年増加してきたものをこの四、五年で、逆にその水準まで今戻すこと
ができつつあります。私はここに一つの未来を見ているような気がします。つまり、
行政の努力だけでは限界がある。行政と府民の皆様が力を合わせたときに、この限界
を超えることができるのではないか。それこそ、府民の皆様が立ち上がり、行政と力
を合わせて次の京都をつくっていく取り組み、私はこれを地域力再生運動と名づけて
3年前から今展開をしておりますけれども、この運動によって限界を超えることがで
きる。そして、行政と多くの府民の皆様、市民の皆様が協働して、その地域のために
立ち上がる。これが地方分権、地方自治、地域主権と呼ばれるものだと思います。だ
れかに財源と権限をもらって、加わった財源と権限を行使するのが地域主権ではあり
ません。私たち地域のことを、きょうはオール京都のメンバーとも言っている方がそ
ろっていますけども、力を合わせて、府民の皆様、市民の皆様とともに行政も頑張る、
無駄もなくして必死にやる、そして府民の皆様も頑張ってくださいという取り組みを
進めることで、この限界を超えていけるのではないかということの取り組みを進めて
いくところであります。

これ以上言うとまた長くなってしまいますので、抽象的で申しわけないんですけど、
ちょっと一例だけ挙げさせていただきまして、今思っている悩みと取り組みを紹介さ
せていただきました。

○コーディネーター ありがとうございました。

府民の皆さんも、今知事さんに言われたように、手を取り合って取り組んでいかないとはいけません。そのしるしとして、しゃべってるときにもう少しうなずきがあれば。日本語というのは相づちがないとしゃべりにくいもので、もうちょっと府民として参加してますよというしるしとして、うなずきがあったらいいなと思います。

私は京都市に40年住んでるんですが、京都市に来たところには非常に魅力的な場所だったんですが、いろんな意味で今の京都市はどうかなと。京都市と京都府はどういうふうと一緒に取り組んで京都府のあすをつくっていくのか。

次は門川市長に、ぜひ話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○門川大作市長 ありがとうございます。

皆さん、元気ですか。そうですね、だんだん目がなれてきまして、顔を拝見しているとすばらしい方々、すばらしいリーダーの方々がいっぱい御参加いただいています。皆さんこっちでパネラーのメンバーになってほしいなという感じですね。

何を悩んでるかということですけど、私の最大の悩みは、国内外からたくさんのお客さんが京都にお越しになります。市長室にも来られます。京都の魅力を一言で言ってください。一番美しい紅葉はどこですか。きょう昼から時間があいたんですけど、お勧めの場所、夜どこで食事したらいいでしょう。こう聞かはるんですね。一言で言えないんですね。これ悩みますね。お花やったら池坊さんと言いますけどね。これぐらいすばらしい魅力の京都であります。日本に京都があってよかった。こんなことを言える町、京都だけやと思うんですね。

そこで悩みなんですけど、その京都のすばらしい、例えば知事から話ありましたけど、伝統産業、今どうなってるんだろう。京友禅は出荷量、最盛期の3.4%なんです。30分の1。西陣織は12%なんです。サトウさんという清水焼ずっと60年、清水焼のすばらしい瀬戸物をつくってこられた方が、こんな厳しいときあらへん、こうおっしゃってる。京漆器、……1,000年を超えて伝わってきたすばらしいもの、世界じゅうで京友禅、西陣織、あるいは京都のいろんな工芸品、物すごい今称賛を受けている。しかし、このままでは10年もたない。京都に来てタクシー乗ったら、物すごい西陣織のことを説明してもらった。京都のタクシーの運転手さん、西陣織のことを勉強してはるで。違うんやと。西陣織で仕事ないさかいにタクシー乗ってはるんや。これが現実なんです。これどうするんや。

それから、中小企業、零細企業が今厳しい。

そして、もう一つは京都市の財政も厳しい。国が三位一体改革ということで、税源を地方に回して、そして、地方交付税を減らすという話。これ、実際どうやったか。京都市は1,300億円を超えてた地方交付税、800億円に500億円減らされた。そのうち税源がふえたのは半分。全国平均24%地方交付税減らされたんですけど、京都市は39%減らされた。大都市、政令指定都市に厳しい物差しに国がしはった。そのために、それは政令指定都市でも名古屋とか横浜とか大金持ちなんですわ。それとおんなじように一律の基準で政令指定都市をやりはったから、京都みたいな町はほんとに工場もない、すばらしい企業はあるけど、工場等制限法で工場は全部外へ行っちゃった。高さ規制とか景観規制、厳しくやってますから。大阪市と京都市と比べると、市民1人当たり京都市に納めてる税金が7万9,000円少ないんですわ。皆さんをいかんと言ってるのと違うんですよ。お寺、神社、大学あるいは周辺部、景観のためにきちっと市街化調整区域に指定してると。木造住宅を大事にしよう。これ全部税金が入らない仕組みなんです。そういうことをして、しかし、いつまでも日本に京都があってよかった、そう感じてもらうためには、京都を小さな東京にしたらあかん。さらに景観規制をしよう。もうあと4年間で、屋上の看板は全部撤去する。パチンコ屋さんのちかちかするような看板は全部禁止する。京都の借景を守ろう。こういうことをやります。これ全部税金が入らない仕組みなんです。こういうことをしてます。

しかし、京都のほんまものの価値を大事にしていこう。そこで悩んでるんですけども、何をしてるかという、そういう伝統産業、たくみのわざ、そういうものと大学のか、研究開発する力、それと先端企業、これ商工会議所の会頭は知恵産業とおっしゃってますけど、そういうものを何とか融合して新たな産業を興せないか。あるいは5,000万人の観光客が来られている。それなら観光客が来られる方が、見るだけやなしに、いろんな京焼、清水焼、ろくろ回してもら、あるいは京都のすばらしい伝統産業、染物、織物、着物買ってもら、そういうことの仕組みをつくっていこう。さらに今、和装産業は危機的ですから、東京へ行こう。そして、東京の20代、30代、40代の人にターゲットを絞って、例えば東京ガールズコレクションと一緒に来年3月、初めて東京ガールズコレクションで京都の和装、着物を着てもら。あるいは3年間、京都市がお金を出して、お金ないんですけど、それで、東京のできれば青山通りの近くぐらいで着物の店を出そう。そして何とか、たくみのわざが続くように

しょう。そんな取り組みをしています。

もう一つは、最大の悩みは地下鉄。1日4,000万円ほど赤字なんです、1日ですよ。何とかしならん。これしかし、京都市は8,500億円使って地下鉄つくった。これすばらしい装置です。市民みんなの財産です。もし、地下鉄が宝ヶ池まで通ってなかったら、京都議定書は誕生してない。昔、醍醐行くのにどのようにしましたか。JRで山科まで行って、山科からバスで醍醐まで行った。今、15分で醍醐まで行ける。やはり環境モデル都市京都には、地下鉄は必要だった。しかし、もっともっとみんなに使うてもらわな、そうしんと、ほんとに地下鉄が1年に140億円ほどの赤になる。そのために政令指定都市で唯一、京都は連結決算で実質赤字になってる。これ何とかしならん。しかし、借金したけども、寂れるために借金したんやなしに、すばらしい都市の装置をつくった。これは環境モデル都市として、地下鉄という装置は非常に大事や。これみんなで生かしていく。同時に国に対して、やはり、人口300万都市でなかったら日本の地下鉄経営はできないような仕組みになってるんですね。この仕組みを国に変えてもらう。そういうことも国にしっかりと要望していきたい。そのために京都市が地下鉄、徹底して合理化しました。地下鉄、私も市長になるまで余り知らなかったんですけど、役所がやってるさかいに赤字なのかなと思って徹底的に調べてもらって、そして民間の経営者も入ってもらって、有識者会議で議論してもらったんですけどもね、地下鉄運営に人件費15%に減ってるんですわ。借金の利息、これが最大の支出なんですね。そういう仕組みを何とか変えて、市民の財産である地下鉄を生かしたまちづくりを力強く進めていきたい。皆さんどうぞ、帰りは地下鉄をお願いします。

○コーディネーター　ありがとうございました。

私も毎日のように地下鉄に乗ってるんですが、今、門川市長のお話の中に、伝統産業、中小企業はどうなるのかと、知恵の産業という話も出ましたんですが、ちょうどその話が出たときに非常に晴れた日差しがこの会場の中に入ってきましたから、ちょっと明るい気持ちになりましたんですが、私の住んでる家が、160年ほど前、江戸後期に建てられた町家なんです。町家に住んでると、何かちょっと例えば電気傘というんですか、電気傘の下によく組みひもを飾りとしてつけるんですが、これが五、六十年たちますと非常に不細工な色になるんですが、京都のすばらしいところというのは、組みひも屋さんに持っていったら、全く同じ技術で全く同じものがずっとつくってきてるから、同じものをつくってくれるという。

町家を維持するためには非常にいいんですが、町家が減っていく中で、中小企業も大変、その知恵の産業は京都のあすをつくっていくんじゃないかなというのが、多分、立石会頭から話が出るんじゃないかなと思いますが、次、立石会頭よろしくお願いします。

○立石義雄会頭 京商会頭の立石でございます。また京都府の商工会議所連合会の会長といたしまして、京都全体の産業の活性化に、それぞれの会議所と連携して今取り組んでいるところであります。

私の悩みは二つございまして、一つは御承知の金融危機による世界同時不況、これを地元産業としてどう乗り切るかということが一つでございます。それともう一つは、やはり乗り切った後の京都産業の次の成長、活性化にどのように方向づけするかという、この悩みの二つでございます。

最初の悩みに対しましては、本年度既に一つは中小企業を中心とした資金繰りなどの金融対策、そして雇用の維持、創出のためのいわゆる雇用対策、そしてことしの不況を想定して観光対策、これの三つに今取り組んでいる最中でございます。きょうは「明日の京都」を考えるということでテーマでございますので、むしろ中長期的な視点で少しお話を申し上げたいと思うんですが、私は中長期で見ますと、やはり京都の産業にも産業構造の問題が存在していると、こうとらえております。ことしの年初に、実はこの不況を乗り切った後の次の成長へどのように構えるかという、その点について三つの構えを訴えました。

一つが環境対応の経済へのいわゆる構えでございます。そして二つ目が、内需経済への構え。そして三つ目が、中国を中心としたアジア内需への構え。この構造的な構えをことしから具体的にやはり取り組んでいく必要性を実は訴えてまいったわけでございます。現実を見ておりますと、長期的な下降傾向の続く伝統産業、あるいは公共投資に支えられてきた建設業、そして大量生産、輸出偏重型の製造業など、いわば新しい事業展開、転換ですね。新しい事業展開と新しい人材育成、これによって新たなライフスタイルや顧客ニーズの変化に適應できるビジネスモデルづくりをやっておかねばいけない、次の成長はないと、そのように私はとらえておるところでございます。

言ってみれば、このようにあすの京都経済の成長のためには短期と中長期、双方のハードルの高い課題に取り組まなければならない。いわゆる今が本当のそのの着手すべ

き私は時期だと、このように思っております。

次に京都産業について、少し触れておきたいと思います。京都産業を一言で言えば、グローバルなハイテク企業もございしますが、中小企業が事業数の99%を占めております。そこで70%の雇用になっていると、これが京都産業の一言で言えば姿でございます。まさしく雇用は、地域の発展にとって最も重要であるという認識を、企業として、まず持つ必要があると思っております。すなわち雇用の創出こそ人々の所得を増加させ、消費の向上につながり、地域発展の好循環を生み出すと考えております。したがって、企業は成長することで雇用をふやして社会的責任を果たしていかなければならない。これを重々に経営者はやっぱりこのことを意識し、社会的責任を実行していかなければならないと、こう思っております。

そのために、地元企業が地域での新しいニーズにこたえて、次の成長する方向と領域を示すためにも、「明日の京都」のビジョンがどうしても必要であるという、私はビジョンの必要性はこういう観点で申し上げているところであります。

次に京都産業の特徴でございますが、お手元に配付しております資料に、グラフでござらんいただきたいと思うんですが、一言で申し上げますと粗付加価値額と産業構造の多様性の二つを合わせてみますと、国内でトップに位置するという特徴を持っております。すなわち、高付加価値経営を京都産業は実践していると、それを証明しているグラフでもございます。この付加価値を大事にするという京都の産業の特徴というのは、港湾都市ではない京都市が、独自の産業都市として生きていくための知恵でもあると、こうとらえております。それは、京家具、あるいは京呉服、あるいは京菓子とか京都の漬物とか京料理などにも見られますように、長い年月の中で培ってきた京都の産業文化とも言えるのではないかと考えております。

ところで、これからの中長期の京都の産業構造を考えますと、国の方向性と整合をとっていく必要が基本的にあるんじゃないかと思っております。今回、政権交代いたしました民主党が目指す内需拡大と地域主権社会は、私が京商会頭に就任以来取り組んでおります、先ほど紹介ございましたように知恵産業の創造と重なるものでございます。京商の役割も、この新しい政権によってますます重要になってきていると認識をいたしております。

ここで言います内需拡大とは、私流に言いますと、人の生き方、暮らし方、町のあり方などに関連した地域ニーズにこたえていくことであると、こう思っております。す

なわち、生活基点のビジネス発想への転換が必要になると考えております。考えますと1,200年の昔から、京都は宮廷文化、あるいは公家文化を中心とした生活文化のもとで、中小企業が主体的に内需経済を発展させてきたという町であると思います。今まさに21世紀の新たな内需経済で、この京都地域の発展をもう一度実現していくという、そういう周期に、世代、時代になってきてるんじゃないかと思っております。

京商では、そういった意味で、知恵産業の創造を目指したさまざまな取り組みをいたしております。京都には長い歴史の中で培ってまいりました人々の生き方、暮らし方、あるいは町のあり方などの知恵と産学公が連携して取り組んでおります知恵のインフラがございます。知恵産業の創造とは、これらをベースに知恵を融合して組み合わせをして、物をつくる人とデザインをする人、そして売る人、そしてサービスする人が新たな知恵を使って、これからの社会にふさわしい新しいライフスタイルを提案して、新しい顧客創造を実現することではないかと、こう思っております。

最後になりますが、知恵産業の事例として二つだけ御紹介しておきますと、一つは九条ネギを扱っておられます、こと京都さんがございます。従来は農業生産者として年商600万円と、大変経営が厳しかったそうでございます。それに対して、そこでネギをよく使われる業者を東京ラーメン店に定められまして、対象としてアプローチをされた結果、営業に行きますと、ラーメンにこだわっていてもネギにはこだわっていない店が大変多かったということで、10軒中2軒という高い成約率につながったということで、京都以外の新たな市場開拓によりまして、これはまさしく顧客創造に成功されまして、今では年商3億円。600万円が3億円を超えているという実績がございます。

もう一つは、漆を扱っておられます佐藤喜代松商店さんがございます。これは漆の用途は木材に限られておりましたが、そこで京都市の工業試験場等と一緒に、どのような条件でも安定して乾く漆の開発に成功されまして、漆の扱いづらさを克服したその結果、皮製品やネイルチップにも漆を塗ることができるようになって、用途が広がって、新しい顧客開拓に成功されているということでございます。

いずれのケースも言われてみますと生活基点のビジネス発想で、なるほどと、自分でもできそうと思うような知恵の使い方ではないだろうか、こう思っております。京商といたしましては、知恵の使いどころをわかりやすくして他の中小企業に生かしてもらって、小さくても知恵を使ったビジネスの広がりをぜひ……していきたいと思

っております。まさしくこれからは小さな企業、すなわちスモールビジネスがローカルにたくさんできるイメージをとらえながら、この知恵産業の創造に努力してまいりたいと、このように思っております。

少し長くなりましたが、以上でございます。

○コーディネーター ありがとうございます。そういう具体例が出てくると、皆さんがさすが、うなずきが非常に多くなりまして。

知恵を使って人の生活に必要なものという、しかし、門川市長の例えば着物産業、どんどん生活から遠ざかっていく。今までの伝統産業がどういうふうに知恵を絞って、この知恵産業に発展していくのかというのが一つの大きな問題だと思うんですが、私たちの生活が変わっていく中で、私、京都へ来て非常に深く感銘を受けましたのが、ほとんどの人が習い事、何かを学んでいる、何かを勉強している。ちょっと皆さん聞きますが、どっかお花とかお茶とか、パソコン教室とかスポーツ関係とか、何か今習い事をされてる方、ちょっと手を挙げていただけますか。僕の想像、ちょっともっと多いのかなと思ってたんですが、あれですね。日本人は例えば詩吟をやっていると、タクシーの運転手さんしながら乗ってきたお客さんに詩吟を聞かすというのは、なかなか日本人はできないんです。外国人が乗ると、詩吟御存じですかって、ちょっと1曲って、すぐ僕はやっぱり外国人ですから、日本人が自分の習い事について話をしてくれるんですが。今、門川市長が言ったように、皆さんがやっぱりなかなか手を挙げないというのは、やってるというのが、日本人は非常に謙虚ですから。しかしその中で、過去の文化を受け継いでいく、その文化を受け継いでいくというのが、この習い事の中で非常に僕は大切だと思うんですが、次、池坊美佳さん、ごめん、コーディネーターというのは段取りをしっかりとやらんといかんというのが、人の順番を間違えるというのはもう一番いかんことなんやな。

ごめん、今の振りは次のときに使いますね。

やっぱり大事なことは、京都で何が起こっているのかというのを京都の皆さんに知ってもらうことが非常に大切なことです。そこでテレビ、ラジオ、新聞というのは大きな役割を果たすんですが、次、齊藤社長から、今の悩みとこれから取り組んでることについて話をしていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○齊藤 修社長 京都新聞の齊藤です。

ハブニングがあるのが生のいいところかなというふうに、改めて思います。少し情報

にこだわった話をしたいというふうに思います。

京都新聞は、御存じのように京都と滋賀を地盤としている地元紙と呼ばれる新聞です。新聞協会の中で、こういう地元紙と呼ばれている新聞社の加盟は80社ぐらいあります。80紙、紙といった方がいいですね。その多くのところが地域社会をよくすると、そういういわゆる地域主義というのを看板に掲げています。京都新聞も当然、地域主義を掲げているわけですけど、ただ、よその新聞社と違いますのは、もう一つ重要な役割がありまして、京都文化の発信ということがあります。きょうはちょっと、なぜ京都文化の発信なのかということと、そういう悩みと対策というのを話したいと思います。

東京一極集中ということが、問題点が指摘されて久しいわけですけど、当然、情報の分野も東京一極集中であります。総務省が2006年に調査をしております、東京発の情報が、全国で占める割合が約23%あります。要は4分の1ぐらいが東京発の情報で占めてるということでありまして、ちなみに京都は5%しかありません。ほとんどこれは、もうコンマ以下のところが多いというふうに出ています。東京からの主な発信者というのは、巨大なシンクタンクと言われております中央官僚の方々、それから学者、評論家、あるいは経済人というふうな方ですので、いずれもメッセージ性が物すごく強いということになります。したがって、質も量もパワーがあるわけで、その圧倒的なパワーの結果として政治も経済も文化も、あるいはファッションも、そういうふうな東京発の情報が席卷をして、日本の世論とか風潮というものをすべて形づくってるんじゃないかなというふうに思います。

しかし、これで果たしていいのかということでありまして、やっぱり健全な世論の形成のためには、一極集中の東京情報にしっかりと対抗して対峙できる言論、あるいは情報、それから価値観の定義ということが必要だと私は思っております。じゃあその役割を担うのは、やっぱり京都だというふうに思っています。もう既に亡くなりましたけど、有名な評論家の加藤周一さんという方がいらっしゃいますけど、この方がある本の中でこんな話をされています。日本は圧倒的に中央集権です。明治以降の歴史は、地方文化をだんだんとつぶして、中央のコントロールが増大する経過だと言っていい。そのように言われた上で、中央、つまり東京に抵抗できるとしたら京都でしょうね。京都は東京よりも長い文化的伝統があるから、京都が最も強力に抵抗できるはずですよ。逆に京都さえも東京にコントロールされるんだったら、もう望みはないと言

っていいんじゃないでしょうかと、こういうふうにおっしゃっています。東京への抵抗という表現はいかにも加藤周一さんらしいんですが、とにかく東京と京都との情報の関係のあり方、そういうものをしっかりと押さえられているんじゃないかなというふうに思います。確かに加藤さんが言われましたように、京都には長い歴史の中で培ってきました豊かな伝統文化がありますし、同時に、こうした伝統文化を背景にして、今日的な知的な集積があるということでもあります。

ことしのノーベル賞の話題は、きのうも新聞、テレビで大いににぎわいましたが、オバマ大統領がすべて話題を持っていったという感じがしますが、去年は京都産業大学の益川先生がノーベル賞を受けられましたし、古い話ですけど湯川さん以降、京都はノーベル賞受賞者を10人も輩出しているということでもあります。京都大学を初めとしまして、50を超える大学の研究機関があります。さらに立石会頭が今申されましたように、知恵産業とも関連しますけれども、京都の伝統文化あるいは伝統産業の上に花開いた国際的な先端企業が幾つもございます。ムラタセイサク君®もいればムラタセイコちゃん®もいるというふうな感じでございます。このほかにない、こうした知の集積をバックにして、東京発の情報に正面から物を言い、価値観を提示していく、そういう意味で京都文化をしっかりと発信していくことによって、よりよい日本をつくっていく、そういう形で京都はしっかり日本に貢献をしていくべきじゃないかなというふうに思っています。

もっと言うなら、低炭素化社会へ向かう中で、京都議定書の策定の地として、京都が国際社会にも物申していく。古いろいろな京都の生活の仕方がありますけれども、京都スタイルと言うべきものを打ち出していく。これによって、京都文化の発信によって世界にも貢献していくということが大切かなというふうに思ってます。つまり、京都文化の発信によって、日本貢献、世界貢献をしていくということでもあります。京都文化をいろんなレベルで多様に、いろんな媒体がありますから、多様に発信をされていかなければならないと思いますし、知事も市長も会頭も最近は積極的に発言をされてますけれども、京都新聞としてはこれらもしっかり受けて発信をしていきたいと思えますし、同時にけさの日曜日の朝刊はいつも「ソフィア」というのを載せておりますし、土曜日の朝刊は「天眼」といって、瀬戸内寂聴さんとか梅原猛さんなどの話を載せてますし、長い歴史になりますけど夕刊に現代の言葉というの掲載しています。そういうような多様な形で京都の知を発信し続けていきたいというふうに、少しちょ

っと宣伝も加えて申し上げます。

少し前置きが長くなりましたけど、残念なのは、若い人たちが最近ばかり新聞を読んでもくれない。これが悩みであります。きょうお越しの方は、恐らく先ほど司会の方が手を挙げさせて、挙げておられましたけど、新聞を読んでいる方と言って手を挙げていただくのも少しおびえておりますので、それはやめまして、これは何も新聞を若い人たちが読まなくなっているというのは、京都だけの問題じゃなくて、全国の新聞共通の悩みでありまして、したがってどの新聞も、例えば教育に新聞を取り入れるというNIE運動というのをやっています。我が社の方はそういう内容もやると同時に、独自に去年の4月から「ソフィアがやってきた！」という企画をスタートさせてます。京都新聞は、京都はほんとに文化人の方がたくさんおられまして、ソフィア京都文化会議というのを組織しています。そのメンバーになっていただいた方々にこの池坊次期家元の池坊由紀さんを初め、その道の第一人者の方に、京都府内の小学校とか中学校とか高校へ出前授業に行っていただきまして、それを日曜日の紙面に掲載をしています。既にもう80人の先生方に出ていっていただきました。次の時代を担う子供たちに京都文化のすばらしさにじかに触れてもらう、同時に新聞にもなれ親しんでもらうという、そういう欲張った企画であります。こうした企画は、こうした成果は今すぐに出るというものでもないんですけども、いずれ京都文化を深く理解する人たちが数多く育って、日本貢献、世界貢献をしてくれればいいかなというふうに期待をしているところです。

以上です。

○コーディネーター ありがとうございました。

齊藤社長は手を挙げさせなかったんですが、先ほど打ち合わせをするときに、この80ほどの全国の地域紙の中で、京都新聞は非常に読まれているという話が出たんですよ、それが門川市長か山田知事から出たと思うんですが。齊藤社長がそのときに、会場で言ってくださいと。だから、かわって私が会場で言います。京都新聞はよく読まれてるんですが。

今、話の中にありました世界に発信する、京都は非常に文化を持って、京都議定書の話も出ましたんですが、私40年京都に住んで、外国で京都という名前を言うと、まだ京都わからないと。大体、日本の町の名前というと、東京、それからあいにく原爆の広島、この二つがよく出てくるんですが、京都がまだまだ知らない。でも京都議

定書から、非常に京都という名前が世界に出てきましたんですが、その京都が一番やっぱり世界に発信しないといけないのは文化だと私は思います。その文化発信に非常に大きな貢献をされている池坊美佳さんの方から話をさせていただきたいと思います。よろしくお願いします。

○池坊美佳委員 皆さん、こんにちは。池坊美佳です。

先ほどシェフさんがお習い事をされている方というふうに。その前に、ほんとにさっき知事もおっしゃってましたけども、この3連休、まさにこの秋晴れの連日にここにいらっしゃる方々は、ほんとに勇気がある方だなと思いながら会場で眺めさせていただいてたんですけれども、いやいや、勇気じゃなくてほんとに京都府、京都市のことを心配していただいたり、ほんとに愛してくださってるからここに来てくださってるんだと思うと、何かほんとに心強くて、京都に生まれ育ってよかったなと改めて思ったんですけれども。

先ほどシェフさんがお習い事をされている方というふうに聞いてくださったんですけれども、私も習い事ではなくて、あえて私は華道池坊なので、お花、ちょっと女性が少ないので若干不安ではあるんですけれども、池坊じゃなくていいんですよ、別に池坊じゃなくていいので、お花をしたことがある方、もしくは男性でもお花してみたいなと思っている方、手を挙げていただけると幸せなんですけれども。ちょっと皆さん、つられて挙げてくださったので、すごいありがたいんですけれども。

私の今の悩みは、やっぱり圧倒的にこの伝統文化、京都にこんなに多くある伝統文化に携わってる方が少なくなったということですね。池坊として、華道人として言わせていただくと、ほんとにお花をされている方、生け花をされている方が少なくなったということが、ほんとにもう眠れないぐらい、眠ってますが、眠れないぐらい悩めます。

あとは、池坊美佳ですと言って自己紹介をするんですけれども、「ええっと、池坊さんってお茶でしたっけ、お花でしたっけ」って言われるんですよ、これが。ちょっと前でしたら、京都ではそんなことは絶対なかったんですけれども、ほんとに京都は学生の町で若い方もたくさんいらっしゃるので、多分もう今の高校生、大学生ぐらいの方だと、もう全然お茶もお花とも言われないうんじゃないかと言われるぐらい、圧倒的にやはり、お花だけではないと思うんですけれども、やはり生け花というものを知っていただけてないなというのがほんとに悩むところなんですけれども、これは別

に何で知ってないのよって、皆さんが悪いわけではなくて、やはり昔のようにお茶にお花にお料理にという花嫁修業というものがなくなって、ほんとに習い事が多様化してきたというのもあると思いますし、まずは何よりも皆さんの生活様式が日本間、床の間の日々の生活ではなくなって、日本間、床の間のあるおうちが少なくなったというところが、ほんとに生け花を知っていただくことも少なくなったところだとは思いうんですけれども。じゃあ逆に海外ではどうかというと、海外では日本の伝統文化というのは物すごい人気なんですね。生け花をしていますとか申し上げると、フラワーアレンジメントではなく日本の生け花ですと言うと、もうすごい大人気と思うぐらい、いろんな質問をしてくださるんです。それはアジアだけではなくて、ヨーロッパ、アメリカ、ほんとに全国共通するぐらい、世界の方々は日本の伝統文化、それはお花だけではなくてお茶もそうですし、お香もそうですし、着物とかも大好きで、日本語も一生懸命勉強されてるんですね。

そういう意味では、すごく日本だけが日本の伝統文化を置き去りにしてきたような、そういう気持ちが私はすごくしてるんですけれども、そういう日本間、床の間、生け花はもともと日本間、床の間から始まったんですけれども、それでも今の生活様式に合う日本の伝統文化、生け花を知っていただく入り口づくりというのを、やはりこちらから提案していかなければいけないなというふうには、ずっと思っています。すばらしいものをすばらしいのでと押しつけて、じゃあこのすばらしいものは、いつ、どこで触れるの、見えるの、だれに見せるのと言われたときに、どこにもそういう場がないのはほんとに意味がないと思うので、生け花は今は日本間、床の間じゃなくても、玄関やリビングやダイニングや化粧台や、どこにだって置けますよという、ほんとに生け花に触れていただく機会、ちょっと生け花をしていただく機会をこちらはすごく御提案をさせていただいてるんですけれども、京都にはほんとにこんなにもたくさんの伝統文化、伝統産業があるんですけれども、それをほんとになかなか京都に生まれ育っていながら知らない、触れていないというのが現状だと思うんですね。

なので、私はもうほんとに1人でできることは限られていますけれども、それでも今は幼稚園、小学校、中学校、高校で、学校華道として少しお花を習っていただいて、お生徒さんに習っていただくと、そこからお母様がされたりとか、そういうのもありますし、今は企業、例えばこういうふうにお会いして、ちょっとお花、お花はもともと男性がするものなので、皆さん生け花は女性だと思ってらっしゃるんですけれども、

もともとは男性が始めているものなんですね。なので、男性でもほんとには大変楽しんでいただけたらと思うんですけども、なかなかちょっと生け花はと思ってらっしゃる方が多いんですけども、こういうふうにお会いして、ちょっと生け花をしてみたいんですと言ってくれる方々にちょっとデモンストレーションをさせていただいて、へえ、こんなことができるんだ、お花って身近なんだなということを知っていただく機会を私は、小さい力ですけどもしたいと思いますし、こんなにたくさん京都にありますので、ぜひ皆様にもお花、生け花を知っていただくのが何よりですが、でも、数多いほんとにあふれる伝統文化、伝統産業を、ほんとに京都人として誇りを持って皆さんにお伝えできるものなので、ぜひいま一度知っていただきたいなと思うのが、私の悩みと取り組みです。

○コーディネーター　ありがとうございます。

日本人が外国に行きますと、もちろん自分の国の代表者になりますから、着物を着るともう非常にさまになる。それに、そこでちょっと伝統産業、例えばお花ができる、生け花ができると非常に外国人とのコミュニケーションがとりやすくなってくると思います。

きょうは京都府のいろんな問題について、これから10年、20年先のビジョンをというのがテーマなんですけど、もっと大きく考えたら、私たちが直面している一番大きな問題というのは環境問題だと思うんです。その環境問題というのは、やっぱり自然界とどうつき合っていくのか、その中でやっぱり自分の家の中に自然界が入ってくる、この生け花の花というのはすごく自然界を意識する上ではいいんじゃないかなと私も思いますけど、きょう美佳さんの話を聞いて、私も生け花を始めようかなとちょっと、会場の皆さんもそういう気持ちになったかもしれません。

パネリストの皆さん、時間が8分ほど押してます。2巡目、頑張って短く。ほんとにこれはきょうのメインになるんですが、いろいろと問題提起をしていただきまして、今の取り組みも紹介していただきましたんですが、これからは京都のビジョン、これから10年、20年先の京都はどうあるべきか、そしてそういう京都をつくっていくためには、だれが何をしたらいいのかということを具体的に皆さんに、きょうはほんとに京都府のトップに集まっていたから、これからいろんなおもしろい話が出てくると思うんですが。

さっきと全く逆の順番で行きたいと思います。まず、今しゃべり終わったばかりな

んですが、池坊美佳さんから提案、よろしくお願いします。

○池坊美佳委員　また私の番が回ってきてしまったんですけども、さっきさんざんしゃべらせていただいたので何をしゃべっていいのかわからないんですけども、何よりもやっぱりさっき申し上げたように、ここにいらっしゃる京都府民の方、京都市民の方々が、何か京都の伝統文化、伝統産業に興味を持っていただいて、趣味程度にでも何かとりあえず触れていただきたいというのが私の願いですね。あと、私はさっきジェフさんがお花をしてみたいとおっしゃってくださったので、これがこの会場だけの言葉に終わらずに、後で控室で詰めてしっかりとお約束をさせていただきたいと思うんですけども。手をたたいていらっしゃる市長は、手をたたくだけではなくて、知事にも市長にも会頭にも齊藤社長にも、皆さんこれを御縁にお花、生け花、ここはもうがつつり池坊でさせていただきたいと思いますけれども、池坊でお花の講習会をさせていただきたいと思うんですけども。

そうですね、伝統文化というのは本当に言葉で言うのはすごく簡単なんですけれども、やはり伝統文化ってすごくいろんなものがこれまでにあった、伝わってきたと思うんですけども、でもその時代その時代に終わってしまったものもたくさんあると思います。それはその時代の生活様式に取り入れられなかったりとか、それを伝えるべき方がいなかったり或者说、今まで残ってきた伝統文化がこの時代にすべて残っているわけでもありません。

でも、今受け継がれてる伝統文化というのは、やはり先ほど申し上げましたように、その時代その時代の人々のそれに対する深い愛情と強い意志と、そしてその生活様式に合ったものをプラスアルファする、ニーズにこたえる何かがあったからこそ、今まで伝統文化といわれるものは続いてきたと思うんですね。私さっき、お子さんだったり男性だったり女性だったり、いろんな方にお花をしていただきたいと申し上げてるんですけども、お子さんにちょっと教えたりすると、すごく楽しんでくださるんですね。企業の方も15年ぐらい前に、やはり京都商工会議所の会で京都の伝統産業、伝統文化を再発見する会というのがあったんですけども、ほぼ100人ぐらい男性だったんですけども、お茶とお花とお香というのがあって、それぞれ選ばれるんですけども、お花が一番少なかったんですよ。それは男性はお茶とかお香、お茶はお呼ばれするときにお手前とか作法を知ってる方がいいですし、お香は何か興味があって、お花が一番少なかったんですね。仕方がないので30人ずつ分かれたんですけども

ども、そのとき初めて私がさせていただいて、皆様にもお花をしていただいたときに、すごい楽しかったと、男性でもできるんですねということで、楽しかったので、ぜひ年に三、四回、お花の会をしてくださいということで、2年ぐらい年に三、四回させていただいてたところ、2年後には、じゃあせっかくなので同好会、生け花同好会をつくりたいと思いますということで、年に今6回なんですけども、もうそれが15年続いてるんですね。一番最初はお花はおけいこをして、それをスケッチをして抜いて、花包みに入れて持って帰るんですけれども、男性はみんなうちのお教室に置いて帰られるんですよ。恥ずかしいと、お花を持って帰るのが。でも、1年ぐらいたつと、三、四回おけいこすると、「いやいや、おうちでします」と、「家内が喜びます」とか「母親が喜びます」と言って、皆さんお花を持って帰ってくださるようになり、あとはほんとに当たり前のようにお花を持って帰ってくださる姿に、私はほんとに何かやってよかったなというふうにいつも思うんですけれども。

まずは京都に生まれ育って、生まれ育ってらっしゃらなくても、ここに京都にお住まいの方々、京都を愛してらっしゃる方々にぜひ何か京都の伝統産業、伝統文化を知っていただいて、やっぱりそれを次の時代に残せるのはここにいらっしゃる皆様、ここにいらっしゃる方しか次の世代に残してはいけないので、ぜひ京都人が伝統産業や伝統文化を忘れがち、置き去りにするのではなくて、皆様の手でもう一度、何か興味のあるもの、それがお花だとうちは一番ありがたいんですが、でもこの際生け花じゃなくてもいいです。とりあえず何かもう一度京都にこんなものがあったんだと思っていただいて、皆様の手で、皆様の意識の中でぜひ、たくさんある中で皆様の手で次の時代に伝えていっていただきたいなと思いますし、やはり何でも御自分が試してみて、試してみて、それで合わないものはやめていったらいいと思うんですよ。でも、何よりもすべて触れてみるということのは大切だと思いますし、それは私が生け花を通して、とりあえず触れてみてください、とりあえずしてみてください、それで合わなければもうあきらめますというふうに申し上げてるので、ぜひ京都を愛して下さってる皆様方が、御自分の意識の中で伝統産業、伝統文化に携わっていただければ私は幸せだなと思うし、あしたの京都は必ずすばらしいものになるのではないかなと思います。時間オーバーでしょうか。

○コーディネーター　大丈夫です。ありがとうございました。

「明日の京都」ビジョン懇話会生け花同好会ができそうな感じですね。

齊藤社長、次、よろしくお願いします。

○齊藤 修社長 先ほど、地域主義、地域社会をよくするというのが地元新聞の役割だというふうに申し上げました。京都新聞社は10年ほど前に、読者の方々の生の声をお聞きするということで、読者応答室というのをつくってます。毎日、五、六十本、電話とかファクスとかメールとかが入ってきます。国政とか山田府政とか門川市政についての御意見も当然入ってきます。府民の皆さんが何を考えておられるのかということ、を多少ともそれでつかむことができるということでもあります。先ほどの京都文化の発信と少し離れますけれど、せっかくですので本日のテーマであります「明日の京都」について少し話したいと思います。

私の描く10年後、20年後にあってほしい京都府の姿というものですけど、新聞の見出しふうに言えば、包み込む社会ということです。包み込む社会とはじゃあ何かと、どう実現するのかということ、そして少しでも知事さんに注文もつけたいというふうに思います。

先ほど、山田知事の方から阪神大震災の話が少し出ましたが、皆さんも14年前の阪神大震災の揺れを京都でも相当感じられた、それを覚えておられる方もたくさんおられると思います。この被災後、がれきの中から警察、それから消防、自衛隊、この人たちの手で救出された人の数は約8,000人と言われています。これに対して、市民の手で救助された人は約2万7,000人ということを言われています。結局、御近所の底力というものがいかに大切かということだろうというふうに思っています。

ところが、ことしの日本新聞協会というところが新聞広告のコンテストというのをやってるんですが、そこでこんな出品作がありました。これちょっと記憶にとどめてほしいんですが、お金を借りるより車を借りるより家を借りるより、お隣さんにおしゅうゆを借りる方が難しい。こういうコピーなんですね。つまり、御近所の底力であり、その源であります地域コミュニティが恐らく急速に衰えつつあるんだろうというふうに思っています。先ほど地域力の再生ということ、を山田知事がおっしゃいましたが、恐らく同じような認識に立っておられるということだろうと思うんですね。経済的に少々つまずいても、お互いに地域で支え合えるという、そういう地域コミュニティが欲しいと思いますし、現実にはもうなかなか難しいことですが、限界集落といわれる地域であっても、結果的に住んでよかったなというふうに思える地域コミュニティが私は必要だなというふうに思っています。

しかし、だからといって数年前にヒットしました、昭和30年代を描いた「ALWAYS三丁目の夕日」というのがありましたけれども、あれ私も団塊の世代ですのでおんなじような時代を過ごしたので、ほんとに懐かしく思いましたけれども、今さらそういう時代に戻るといってもいけませんし、恐らく制約が多かった時代ですから、逆に戻るべきでもないだろうというふうに思っています。

そこで考えたのが包み込む社会ということであります。この包み込む社会というのは、実際にどうしたらつくれるんだろうと、そういう具体的な方策を実は現場の記者と一緒にちょっと考えてみました。キーワードはやっぱりNPOということであります。現在日本にありますNPOは、もう実にさまざまなテーマ別に専門性とそれに関心の高い人たちが集まって取り組んでおられると、縦割りになってるわけですね。この今は従来型のNPOを、今度は地域、地域単位で改めてくくり直してみるということです。そうしますと、くくり直したこの地域には、従来型のNPO活動で蓄積をされたノウハウ、あるいは人脈、そういうものがそれぞれに集まってくるということになりますね。そうなりますので、その地域で起こってくるいろんな問題、これをその地元の人たちと一緒に解決できる、そういうふうになるだろうと思います。

つまり、従来型のNPOと、それから既存の自治会組織と、それから今言いました新しくくくり直した地域型のNPO、これがうまく連携することによって、地域コミュニティのきずなをつくり直し、結び直し、それから問題解決の能力を再構築していくと、そういう仕掛けを考えました。これが京都府内の各地域にアメンバーのように広がっていくというのが、私のイメージする包み込む社会であります。この包み込む社会においての主役はNPOと言いましたから、当然府民の方ということになります。ただ、この包み込む社会の拠点がやっぱり要るわけで、その拠点の施設の確保、あるいはそのNPOを指導するリーダーの方、あるいはマンパワー、こうした方たちの育成にはもちろん京都府の支援が欠かせないわけになります。ことしの8月でしたですか、京都地域創造支援基金というのができましたけど、こういうのは恐らく私が今申し上げているような地域型のNPOにぴたっとはまってくるんじゃないかなというふうに思います。

ただ、今簡単にそういうふうに申し上げましたが、恐らく今後は法的に少し難しいような課題に取り組もうとするような、そういう地域型のNPOが出てくるだろうというふうに思います。例えば、幼稚園の子供と保育園の子供と学校が済んだ後の児童

とお年寄りと、そんな方々と一緒に一同囲むような形のNPOをつくってみよう…
…恐らくこれは縦割りの今の法的な制度の中ではなかなか難しいのではないかなと思いますので、そういうときには政治家としての知事さんの出番が求められるだろうなというふうに思っています。

地域の再生というふうに知事がおっしゃったわけですけど、相談しやすく支援も求めやすく、しかも批判もしやすく参画もしやすいと、そういう京都府であってほしいという声が、このビジョン懇の中の先生方のだれかがおっしゃっていましたが、私もこうした声に的確にこたえていただけるような、言ってみればこれも新聞ふう言えば、しなやかな府政というものを山田知事には期待したいなと思っております。

地方分権、それから地域主権の流れの中で、私どもは地元の新聞として、地域のニュースをより広く、深く伝えていかなければならないというふうに常々思っておりますし、目下年間企画で「地域再生」というのを連載して、これは全国各地の新聞社と連携をしてやっておりまして、全国で取り組まれています地域再生に向けた試みを紹介しています。今後も地域社会をよくすることに役立つ情報、あるいは価値観の提示というものに邁進していきたいというふうに思っております。

○コーディネーター ありがとうございました。

今の齊藤社長の包み込む地域づくりという言葉聞いて、キャッチコピーをちょっと考えたんですが、やっぱり京都、日本を代表するものというのは一つ、ふろしきなんですね、その包み込むもの。だから、ふろしき運動というような言葉にできるのではないかなと思います。もう一つ、今、齊藤社長から出ました話なんですが、きょうの呼びかけ人である山田知事が知事になってからずっと京都府民の皆さんとともにやっていきたいという気持ちで、「明日の京都」ビジョン懇話会もつくって、きょうのイベントもその一環としてある。だから後ほど皆さんの御提案、考えていることも聞きたいと思いますが、残りの京都のトップに立つ3人の話を聞きたいと思います。

商工会議所の立石会頭、これからの10年、20年先の京都をどういうふうにお考えになりますか。

○立石義雄会頭 あしたの京都づくりのために、まずグローバル社会における都市という認識がまず必要ではないかなという気がいたしております。現在、先進国では競争一辺倒の資本主義の見直しが必要になっておりまして、言いかえれば、先進国では弱肉

強食の資本主義型から弱者を保護する社会構造へ変わりつつあると、このように認識をいたしておりますが、とはいえ10年、20年先を考えた場合には、物の豊かさと心の豊かさ、あるいはヒューマニズムの豊かさ、こういったものが最適化された社会が私は実現していくのではないかなと、そんな受けとめ方をいたしております。

一方で、新興国、発展途上国では、これからより弱肉強食の資本主義型の社会になっていくだろうと見ておりまして、今日の世界はこうした二重構造の時代に入っていくだろうととらえております。そのような中、ボーダーレスの地球社会になった今、地球人、地球に住む人々は国境を余り意識しなくなってきていると。日常パリに行ってくる、おれはパリに行ってくるとか、私はニューヨークに行きたいとか、このように国というよりも地域、都市のイメージでとらえる現象が非常に高まってきているということでございます。日本にも多くの都市がありますが、私ぜひ京都に来たいと言われるようになりたいなと、こう思っております。

これからは国家よりも地域や都市の魅力が大変重視される時代でありまして、都市のブランド力をいかに発揮できるかという都市間競争が熾烈になってくると。ここの競争にいかに勝っていくかということが一つの観点でございます。

そして私は、これから10年から30年で世界を変える五つのメガトレンドがあるのではないかと考えております。一つが超グローバル化、二つが地球視点、そして三つが情報コミュニケーション技術、いわゆるICT、バイオ技術、この三つ目が技術でございます。そして四つ目がポスト金融資本主義、そして五つ目が新しい価値観。これに私はプラスして、日本では少子高齢化があるのではないかと考えております。

きょうはこの5番目に上げました価値観の変化について、少し触れさせていただきたいと思うんですが、新しい価値観とは二つを申し上げておきたいと思うんですが、一つは先ほども触れましたように、これまでの物の豊かさだけでなく心の豊かさも実現するための、いわゆる安心・安全、環境、健康、食料、あるいは教育、そして人権、こういったものへの価値観をここで見つけ出していくと、見出していくということがあります。これは、これまでの工業社会が未解決のまま残してきた、いわば工業社会の忘れ物を取り戻すという価値観への変化であります。社会のパラダイムの転換も即していく原動力となっていくだろうと考えております。今日という持続化の社会、低炭素社会にも通じる価値観であります。

もう一つは、今の10代、20代といった若者の職業観は、収入の高さ、安定性など

けでなくて、いかに社会貢献できるかという新しい価値観が高まりつつあるのではないかと考えております。このような新しい価値観の変化をとらえまして、30年後という視点で京都のありたい姿を考えてみる必要性を申し上げたいと思うんですが、「明日の京都」のベースにはやっぱり人づくりが基本的に大切になってまいります。30年後は今の10代、20代の若者、本日司会をしていただいております村井さんも含まれるわけですが、こういった若者が40代、50代になって社会のリーダーになっていくと。したがって、そういう若者の価値観を踏まえて、30年後の京都のありたい姿を考えていく必要があるのではないかと、そう考えております。このありたい姿に向かってみずからが取り組みつつ、それをパートナーと共有する。連携できるものを私はビジョンと呼びたいと考えております。こうしてほしいという他人に頼るだけでは一体的な取り組みにはならないと考えております。そこで京都の産業界のありたい姿とはと申し上げますと、基本的には技術を知恵によってイノベーションを興して、それによりいわば持続化の社会、あるいは低炭素社会の中で持続的な成長を続けて、世界をリードできる都市の一つになることではないかと、私はそう考えております。

高い文化と学術を有する創造的都市は、その時代の産業に革新を起こすというのが私の持論であります。先ほども申し上げましたように、昔からの人々の生き方の知恵、あるいは産学公連携の知恵のインフラを有する京都は、そのポテンシャルを十分に持っている、このように確信をいたしているところであります。

このビジョンの実現には異なる分野、あるいは他の地域との連携も当然必要になってまいります。30年後という中長期の取り組みには、学術との連携は必須であります。京大、同志社、立命館など、大学やけいはんな学研都市などで、先進的な研究開発が京都のビジョンの実現に必ず貢献することを期待しております。

そして、強調しておきたいことは、教育による人材育成こそが経済の成長と雇用の創出につながって、地域の発展を可能にして、ありたい姿を実現させるということでございます。そのためには教育は社会のための投資ととらえて、個人の経済状況に影響されない教育機会の平等による人づくりを実践していく社会的なコンセンサスや制度が大切になるということでもあります。

最後になりますが、ビジョン共有の必要については、このビジョンを共有することがさまざまな施策や事業がありたい姿を整合視させていくということでありまして、あるいはありたい姿に近づくためにはどの政策や事業を重点的に行うのか、また優先度

はどれが高いのかを見えるようにするための私は物差しとなると、このように考えております。

以上でございます。ありがとうございました。

○コーディネーター　ありがとうございました。

最後のお二人さんにいろいろと話が出ましたんですが、いかがでしょうか。門川市長、お願いします。

○門川大作市長　ありがとうございます。もう3人の話、感銘深く、的確なお話を聞かせていただきました。

……京都のほんまものの魅力、蓄積されたもの、それを私たち京都人自身が再認識する必要があるんだな、池坊さんの話を聞かせていただいても、立石会頭、齊藤社長の話聞かせていただいても、そう思います。

私は、今クールジャパンと言われている。世界じゅうの人が日本格好いい、和装産業からお茶やお花から、あるいは漫画、アニメ、和食、世界じゅうで高く評価されているんですね。第3のジャポニズムと言われている。物すごい人気があります。そして京都に来て京都に泊まれる方が、この5年間で外国人、45万人から94万人にふえている。フランスなんかは1万7,000人から5万5,000人にふえているんですね。私も着物を着てボストンも行きました。去年は姉妹都市50周年でパリへ行きましたけど、大変な人気なんですね。ただ、お茶かお花の先生やと思わはるんですね。ちょっとぐらい、たしなまなあかんと思うんですけど。

そこで何が京都の魅力かというたら、その最大の魅力は京都の人間の生き方の美学、暮らしの哲学、こういうものが京都の魅力やと思うんですね。それが京都の魅力を醸し出してる。それが情報が東京一極集中している、あるいは市場経済の原則のもとに、京都のほとんどの人がお茶もお花も知らない、京都の伝統産業を軽視しているという、普通の京都、小さな東京になっちゃう。みんなでそれを再確認しながら、京都はお茶もお花もあらゆる伝統産業も身近に触れられる。それをみんなで生かして、同時に全国、世界に発信していかなければならないんやな、私自身、自分の今までの生い立ちの中で余りそういうことをしなかったのも含めて、やりたいな、頑張りたいなと思ってます。

そこで、一人一人の暮らし、ライフスタイルとかそういうことと同時に、産業として、あるいは都市政策として、そういうこと、京都のあらゆる強みを生かしていく、融合

していく。知恵産業もそうであります。観光と伝統産業を融合していこうと、そういうこと、あらゆることをきちっとやっていこうと。そのことが次のテーマであります環境をキーワードにした都市経営、京都が今世界じゅうの方々から環境問題としても注目されている。そういう京都、京都という言葉は都市の名前を超えて、動詞になっている。フランスで最近、環境問題に取り組む高校ができたんです。その高校の名前、Kyoto。Kyoto高校なんです。これぐらい京都が環境を象徴する名前になっている。そういうときに京都人がしっかりと頑張らんなんなど。そこでその次に、齊藤社長も立石会頭もおっしゃった地域主権時代、包み込む、ふろしきと言いましょかね。大いにみんなで、これ大ぶろしき広げて実践したらいいんじゃないかと、目標高く。

私、いつも言うてるんです。先ほど地下鉄の赤字が大変やと言いましたね。これみんなで頑張ればできるんです。今、健康問題、40歳以上の人に、今メタボ検診が始まりました。メタボを治すのは何がいいか、和食と歩くことです。朝ちょっと早く起きて、そしてマイカーで通っていた人が、朝歩いて市バス、私設バスでもよろしいよ、地下鉄に乗って、そしてその歩く道でお子たち、お年寄りにおはよう、こんにちはと声をかける。すばらしい景色を眺める。そのことによって、健康にいい、環境にいい、景観にいい、子育てにいい、教育にいい、そして地下鉄も含めて公共交通にいい、そして経済の活性化になる。それから、外国人もおられるね。それで話しかけると国際化にもなる、コミュニティがしっかりする、危機管理にもなる。そして暮らしの美学、暮らしの哲学を次の世代に伝えられる。これ全部……。これずっとやったら……なるんですね。こうすることによって国民健康保険、物すごい赤字ですけどね、健康になったら国民健康保険にもいいしと。こういうことは、お金使わずにできるんですね。

そして今、大変な不況であります。しかしこの不況、10年も20年も30年も続いた不況はないわけ。必ずこの不況のトンネルは越えられる。そのトンネルを越えた先に、私たちはどういう景色を描くのか、どういう風景をつくっていこうとするのか。またかつてのように大量生産の時代に戻るのか、ガソリンで走る車がいっぱいになるのか。そういうときに私たちが地域主権で家族、地域のきずなを大事にしていく、障害のある人との触れ合いを大事にしていく、みんなで環境を大事にしていく、そういう社会を。地球にも優しい、環境にも優しい、人と人との関係もいい、そこでしっかりとお年寄りの安心・安全も、次の世代のはぐくむ人づくりという話が出ましたが、人づくりもしっかりとしていく。そういう京都ならではの地域主権時代がつくっ

ていけるやないかと。

そのときに、我々行政の人間が何をしんならんかと。私は今までの行政の最大の問題は、一つは縦割り行政。行政が縦割りですので、先ほど齊藤社長がおっしゃったNPOまで縦割りになっちゃう。縦割り行政をやめる。それから、国、府、市、二重行政、ときには三重行政。もう一つは行政主導の仕事。日本じゅうで行政主導の仕事というのは全部破綻してます。それも私あちこち回るんですけどね、回ったら、私とこの地域過疎ですから、行政何とか……して頑張ってください、何か考えてください。あきませんよ。行政が考えてプラン出しても絶対に成功しませんよ。これ日本じゅうで失敗してるんだから、皆さんが案を出してください。そしてそれを実現するために、この部分は行政がやるということやったら一緒に考えてやりましょう。私は融合と「共汗」ということを言っています。あらゆる政策を融合しよう。その融合できるのは地域や、地域で融合する。同時に縦割りを廃止して政策を融合しましょう。同時に行政と市民の力を、ほんまにすばらしい京都人の力、伝統の力、文化力、地域力、それを発揮してもらう。

そして二重行政、三重行政を打破して、山田知事と私と公開のもとでの府市行政協働パネルというのをやって、そしてテーマごとに、六つのテーマでしたね、さまざまなことをやっております。例えば、今、市バス。地下鉄が大変赤字やと言うんですけど、10年前、市バスが50億円も60億円も赤字やったんです。この5年間単年度黒字になってるんです、一般会計から30億円ほど出してるんですけどね。大阪は戦前の掘った地下鉄があるから、地下鉄は黒字で市バスにお金出してはる。京都市は逆でして、何とか市バスは黒字になってきた。でも、これもっと黒字にできるの違うか。そうすると地下鉄を援助できるの違うかと。そのためには便利な市バスにする。そのためには優先道路。今、優先道路に幾つかしてるんですけど、それをもっと、これは京都府警の御判断、山田知事頑張ろうと言ってくれはるんですけどね。市バス優先道路にする、優先車線をつくる。そしてPPPSというて、バスが来れば信号が青になっていくと、こういうシステムにすれば、自動車に乗るよりもバスの方が便利やと、こうなったら家計も助かるでしょう、トヨタが困らはるかもしれんけどね。環境にもいいと、こういうことを府市しっかり協調してやっていきたい。

最後にですね、同時に京都のすばらしさというのは、これは日本の宝です。世界の宝です。これを京都市民の税金だけで守っていくというのは、京町家も大変だ。全国一

律の相続税や、全国一律の消防法や建築法や基準法やと、これでは無理。だから、今北海道が大事ということで、北海道に国の予算5,000億円ぐらい毎年入ってるんですわ。それは別に削れと言うてやしまへんよ。でも日本の宝、京都というなら、例えば電線、電柱を地下に埋めていこう、これ今一生懸命やってるんですけど、今、京都市の財政状況でやってたら、あと800年かかりまんねん。遷都2000年にはきれいになるんですけどね。そやけど、そんなほかの予算、福祉の予算を削って、電線、電柱地下にできませんやろ。これはやっぱり国家戦略としてやってほしい。同時に観光京都、いや観光都市、観光日本をいうなら観光庁の分室を。京都の文化が大事、日本の文化が大事というんやったら、文化庁の分室を京都に持ってきてくれはらへん、こういうことを言うてます。こうした世論を高めていくことが大事ですねん。そのときに、私は地元のマスコミが大事やと思うんですね。京都新聞、京都の放送局、これは京都市民の財産です、府民の財産です。皆さん京都新聞を読みましょう。そして情報を共有する。情報を共有することによって危機感も共有できる。課題意識も共有できる。そして同時に行動も共有して、すばらしい京都をみんなで一緒につくっていく。別にほかの新聞も読んでいただいたらいいんですけど、京都のことをみんなが知る。京都のすばらしさも、京都の課題も、問題点も、そして行動していく。そういう京都をつくっていきたいと思っています。ありがとうございます。

○コーディネーター ありがとうございます。

拍手がちょっと飛んでくるんですが、今の話を聞いて、少なくとも私たちはみんなDo You Kyotoと書いてあるふろしきを持って、歩いて、公共交通手段を使うと、その辺ぐらいから始めようかという気持ちになりましたんですが、生け花も勉強しながら、京都新聞も読みながら。

最後、ピンチですね。知事さん、今の話を全部まとめて、京都府知事としてこのビジョンを本当に成功していくためにはどうしたらいいんでしょうか。10年、20年先の京都府はどうなるんでしょうか。よろしくお願いします。

○山田啓二知事 でもここで結論を出しちゃうと、これから京都ビジョンをつくる夢がなくなっちゃうので。余り結論めいたことを言うと、ここからきょうは出発点ですから。

私やっぱりほんとに時代が変わったなという、きょうまさに京都のオピニオンリーダーとも言える4人の方のお話を聞いていてつくづく思いました、ほんとに。もう政治家に聞かせたいみたいな、ここにいないですね。と申しますのは、多分20年前ぐらい

かな、こういう集まりをやったら全く違う話になったと思うんですよ。あそこに道路をつくってくださいとか、こういうものがないじゃないですか、こういう物をつくりましょうとか、そういう話であふれてたと思うんですね。ところがきょう、そうした物系の話はほとんど出ない。どちらかというところ、文化を子供たちとか、地域をしっかりと人で包み込んで再編していく。人で再編していこうとか、それから価値観を変えて、これから知恵を生かしていこう、そしてそれを踏まえたまちづくりをやっていこうじゃないか。せいぜい物で出たのは電線を埋め込むという話ですからね。全く多分20年前と、こういうビジョンをつくったときのオピニオンリーダーの人の意見は違ってきてると思います。

私はだけどこの変化というものを、まず今回のビジョンに反映させなければいけないなと思いました。そして、皆さんのおっしゃっている中心に必ず、必ずいるのは、あるのは人です。京都の人です。そして人の力です。伝統というのは別に神社仏閣にあるわけじゃありません。まさに人にあるものです。人が伝統をつくり出していかなければ、その地域は単に遺跡であり遺産にしかありません。今も生活をして新しい文化を生み出しているからこそ、そこに初めて伝統という言葉が当てはまるのであって、紛れもなく、これは人の力以外の何物でもないと思います。

地域でさまざまな活動をする人の力、そして知恵を生み出すというのは、コンピューターが生み出してくれるわけでも何でもありません。価値観を今の時代に合わせて、人の力を高めることによって初めて知恵産業は生きるんだと思います。そうした面からしますと、ほんとに私たちがやっていかなければならない、10年後を見詰めてやってかなきゃいけないのは、こうした京都の人の力をどうやって守り、未来に向かって育てていくのかなということに、私はやっぱりビジョンとしては尽きるんじゃないかなというふうに思います。

ここで結論を言っちゃおうと、またうちの職員が何も考えなくなりますので、ただ私は三つだけはやっぱり必要だなと思うことを述べさせていただきたいと思います。一つは、人の力を発揮するためには、じゃあ何をしたらいいのか。その1は、安心して力を発揮できる環境ですね。あすにおびえていたら力を発揮できないと思います。安心してやっぱり暮らせる、安心して働ける、安心して老後を育てる、安心してお子さんを生んでいただける、そういう環境がなければ人の力なんてあり得ないと思っています。

私はやっぱり、この10年20年、日本は一つ間違いを犯しているなと思うことがあります。それは何かと申しますと、ここは先ほど言いました縦割りの問題とも関係するんですけども、ナショナルミニマムということがあります。一番いい例から申しますと生活保護とか医療の保険とか、介護問題とか障害者福祉ですとか、こうしたナショナルミニマムです。つまり、これは日本じゅうどこへ行っても一定の、最低限という言い方をする人もいますけども、生活は保障される。そして医療はどこでも平等に受けられる。障害がある方も、そしてノーマライゼーション、ほんとに地域で暮らせるようにしていく、これはナショナルミニマムです。日本の国家としてあることです。地域によって違ってはいけないことです。ところが、生活保護の問題、医療保険の問題、介護の問題、障害者福祉の問題、どこが担当しているか、すべて市町村です。市町村はそのために物すごい力を使っています。頑張っています。でも先ほど門川市長さんがおっしゃったように財政的には厳しい。すごくお金持ちの市もあります。貧しい村もあります。そこによって、そうしたナショナルミニマムの水準が今違ってきています。これは本当に正しいやり方でしょうか。人が力を発揮できるあり方でしょうか。安心している世の中でしょうか。私はこれからのまず10年、日本のナショナルミニマムをもう1回考え直さなきゃいけないというふうに思います。それをやるためにも、国と市町村の間にある都道府県というものの役割を、私は再構成をしていかなければ、安心して人の力を生かす世の中は来ないと思います。

例えば、国に全部任せればいいという人もいます。でも地域の人の気持ちもわからない福祉があってはいけません。市町村と連携をして、市町村が例えば老人の皆さんは健康管理をするとすると、介護福祉や医療は都道府県がじゃあ全体として……ということをしなければ、地域によって異なります。京都でさえ、北と京都市と南では違うわけですから。この地域特性を……。忘れてはいけないのは、年金というナショナルミニマムを国に全部任せたら、社会保険庁と役所は何をやったか。住民の皆さんとの対話がない、住民の皆さんのチェックもない、住民の皆さんとの協働もない、そうした国の組織がどうなっちゃったかということを私たちは考えて、ナショナルミニマムの再構成をして、まず人の力を安心して発揮できる社会をつくらなきゃいけないと思います。

そしてその上に今度は、先ほどから皆さんがおっしゃっているように、人が支え合う、人がともに協働し合う、京都府と京都市も力を合わせる社会をつくらなきゃいけない

と思います。国が国のことをやる、都道府県が都道府県のことをやる、市町村が市町村のことをやる。そこにダブリができるだけ少なくなるのはもう当然です。しかしながら、国は国だけのことをやって都道府県のことには知りませんよ、都道府県は都道府県のことをやって市町村のことには知りませんよ、市町村は市町村のことをやって都道府県や国とは関係ありませんよとやったら、この三つの力はどれほどばらばらに無駄に使われるでしょうか。力を合わせていくことがあって初めて、私たちは府民の皆さんのためにできることがあります。そして府民の皆さんも力を合わせていただければ、先ほどの安心・安全の問題一つをとっても、行政の限界を超えることができる。だから、自分たちで支え合って立ち上がって、自分たちで支え合って働ける社会をつくっていくこと、そのために先ほど齊藤さんがおっしゃったような包み込むような社会、協働してみんなが行く社会をつくっていかなくちゃいけません。この再構成は、これも大変難しい話ですけども、10年20年かけてやっていかなくちゃいけないと思います。

そして、その上にやっぱり京都ならではの私たちは地域づくりをしなくちゃいかんと思います。そして、それはやっぱり私は文化と環境だと思っています。東京にない京都にあるもの、これはやっぱり文化と環境、そしてそれも文化と環境の融合であると思っています。京都にも迎賓館があります。東京にも迎賓館があります。東京にも国際会議場があります。京都にも国際会議場があります。でも全く違います。なぜかというと、京都の迎賓館からは御苑の美しい森しか見えません。国際会館も一緒です。宝ヶ池と北山の風景しか見えません。東京へ行ってください、赤坂の迎賓館から周りの高層ビルがざっとのぞかれる。有楽町の国際会議場なんて、横はビルの壁しか見えへんもん。

日本の文化というのは京都にあるんだと思います、これを大切に。天橋立だって、あれを自然と思ったら……私は違うと思いますよ。あれは文化と環境の融合です。あそこにある波形になった白州、あれ1本1本、京都府手を入れてつくっています。砂が流れないようにする護岸によって、あの波形は守られています。松、1本1本に京都府は予防注射を打っています。それによって守られています。先ほど池坊さんの言ったお花、お茶、すべて環境文化であり環境芸術です。自然がなければお花は成り立ちませんよね。お茶もそうです。おいしい水とお茶の葉があって、そして水を大切にしないと成り立たないんです。そこから生まれてくるものというのを京都は大切にしていける。私はやっぱり10年後の子供たちはほんとに、池坊さんの話じゃないけど、京都で生まれ育った子はお茶とお花はできるようにしたいと思いますね、ほんとに。

そして、きょう学生祭典をやっていますけども、そういう京都にあこがれて多くの人が集まってくる。京都に行けば自分たちの力を生かせる。自分たちの希望を持てる。こういう人が、エンパワーというような言い方がありますがけれども、安心して暮らせる、ともに支え合う。京都に来れば文化や環境でエンパワーされて、それを産業に、自分の将来に生かしていくことができる。こういう京都にせないかんというのが、何かきょうのお話を聞いてて勇気づけられたような気がする、私の一つの今の段階ですよ、あしたになったらころっと変わるかもしれませんが、そういう思いですし、そうなりゃ絶対京都はどの地域にもというか、やっぱり世界の中で京都があってよかったということになるんと違うかなというふうに思います。

○コーディネーター ありがとうございます。

私の専門は異文化コミュニケーションなんですが、文化と文化を比較するときに三つの基本的関係を見るんです。自然界との関係、ほかの人との関係、そして時間との関係。きょうは自然界、いわゆる環境との関係、それから人間との関係は随分出ましたんですが、時間との関係というのはきょうの話の中にあんまり出ませんでした。「明日の京都」ビジョンというのは、10年20年先という考え方なんですが、時間を考えるときに二つの違う時間があると異文化コミュニケーションでは言います。一つは線のような時間。これは過去・現在・未来。いわゆる川のように、線のように流れていく時間ですね。きょうは皆さんそういう時間を少し考えたと思うんですが、もう一つは円のような時間。朝昼晩、春夏秋冬と。

私は160年前に立てられた町家に住んでる関係で、旧暦カレンダーをかけてるんです。旧暦カレンダーの中に二十四節気、七十二候という非常に自然界を観察しながら時間を、円のような毎年毎年めぐってくる時間を大切にしてきた京都の文化の根底に、この円のような時間とのつき合い方があったと思うんです。皆さん、少なくともあすの京都のビジョンをつくっていくためには、私たちが生活の中でもっと毎日、月の変わっていく姿、自然界の変わっていく姿、そして皆さんと御近所の皆さんとの関係の中で、朝昼晩という円のような時間の中に自分が生きているということを考えてほしいと思います。異文化コミュニケーションの中で、日本人は非常に受信力が強い、世界1番、一を聞いて十を知るというのは日本人なんですが、発信力が乏しいとよく言われるんです。

きょうは府民の皆さん、残り時間は非常に少ないんですが、このパネラーの皆さんの

話を聞いて、府民の1人として発信するという気持ちにぜひなってほしいと思います。行政だけが京都のあすをつくっていくのではなくて、府民一人一人がつくっていきます。ほんとにきょうパネラーの皆さんから貴重な話をいろいろ聞くことができました。会場にお集まりになりました皆さんも大変貴重な時間を過ごしたと思いますが、一番役割を果たさなかったコーディネーターの私としては、ちょっといろいろと謝らないといけない点があったと思いますが、この辺でパネルディスカッションを終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

○司会 皆さん、お疲れさまでした。

ここで府議会議員の方にお一方駆けつけていただきましたので、紹介させていただきます。府議会議員、豊田貴志様です。

ありがとうございます。すごく白熱したパネルトークを聞かれまして、皆様ももっともっと京都府政、京都市政に対していろいろ言いたいことがあるかと思うんですけども、ちょっとお時間の方が予定時刻をすごく回っておりますので、大変申しわけございませんが、その思いをお手元にありますアンケート用紙の方に御記入いただきまして、後ほど会場の出口にありますアンケート回収箱の方にお入れいただいてよろしいでしょうか。御予定していた提案の方は言っていただけないんですけども、アンケート用紙の方にぜひよろしくお願いいたします。

ありがとうございました。それでは、最後に本日のまとめを山田啓二京都府知事からお願いしたいと思うんですけども、その前に、立石会頭から一言だけいただければと思います。

会頭、よろしくお願いいたします。

○立石義雄会頭 知事、そして市長の方から、ビジョンづくりに着手する話が出まして、私はその「明日の京都」のビジョンをつなぐことを提案したいと思って一言発言させていただいたわけですが、ぜひ関係する京都の各界のトップでビジョンを語る懇話会をつくった上で、その場をそれぞれのビジョンをつなぐブリッジの役割を持たせてはどうかという提案でございます。

そして、その内容を齊藤社長にお願いして、京都新聞の協力のもとに、紙面を通して府民、市民に紹介することによって、府民、市民にも知っていただくというようなことをしてはいかがかということを、きょうのパネラーの皆さんに提案しておきたいと思います。時間をいただいて恐縮でございました。ありがとうございます。

○司会 ありがとうございました。

それでは、山田知事、よろしくお願いいたします。

○山田啓二知事 きょうはほんとに私どものパネルディスカッションを熱心にお聞きいただきまして、まず心からお礼を申し上げたいと思います。そして、パネラーの皆さんにも、ほんとにこれからの京都のために大変有意義な御意見、御提言をいただきまして、心からお礼を申し上げたいと思っております。しかも最後に会頭から大変これから未来に向かって京都府と京都市が、やはり京都の場合には246万の府民のうち147万人が京都市でございますので、京都府と京都市が今の話でございましたようにブリッジがないととんでもないことになってしまうというのが、私どもの一番の思いでありますので、そうした提案をいただきましてありがとうございます。

それから会場の皆様には本来御提案をいただく予定だったんですけれども、ふだん私だけだったら正直言ってまだ時間はあるのですが、忙しい方がこれだけそろっておりますので、御提案をここでいただくということができなくなりました。どうしても言いたいという方はいらっしゃいますでしょうかね。もしあれだったら手を挙げていただけますか。お一人。じゃあその方は、この後私がお相手をさせていただきます。私は時間が少々ございますので、ちょっとお話を聞かせていただきます。もし、ほかにもおありでしたら、おわびに私がお聞きいたしますので。そしてそれによってまた、きょうはほんとに出発点でございますので。これからが始まります。そしてこれから始まっていくときにやっぱり欠かせないのは、皆様のほんとに意見であります。皆様の提案であります。皆様の思いであります。これがないと「明日の京都」ビジョンなんて、幾らつくったって単なる行政がつくった絵にかいたもちになります。

そうした面で、きょうのアンケートも書いていただきまして、ぜひともこれからまたさまざまなところで御意見を伺わせていただく機会もつくってまいりますので、関心を持っていただきたいと思います。行政に関心を持つこと、京都府、京都市の未来に関心を持つことこそ、一番大きな私は地域主権をつくる原動力であるというふうに思っております。

本当にこうして御参加いただきましたこと、もう1回心からお礼を申し上げまして、締めくくりのあいさつとさせていただきます。ありがとうございました。

○司会 ありがとうございました。

これをもちまして、「未来をつむぐ「明日の京都」ビジョン あなたとつなぐ府民交

流会」を終了させていただきます。ありがとうございました。

ここで、ステージの皆様にご退席いただきます。本日は本当にありがとうございました。